

博士論文要旨

多面的音楽家としてのフィリップ・ゴーベール  
—— 演奏活動の調査および全作品目録作成による音楽家像の再考  
(フルート作品の解題付き) ——

Philippe Gaubert comme un musicien aux multiples facettes :  
la reconsidération à travers une enquête sur ses activités d'interprète et  
l'établissement d'un nouveau catalogue de ses œuvres  
(avec annotations des œuvres pour flûte)

高柳鞠子 TAKAYANAGI Mariko

フィリップ・ゴーベール Philippe Gaubert (1879-1941) はフランスの音楽家で、フルート奏者、指揮者、作曲家として活躍した人物である。当時を代表するフルートのヴィルトゥオーゾとして名を馳せた彼は、多くのフルート作品を作曲しているが、それらは今日の演奏会でも頻繁に取り上げられ、ゴーベールのフルート作品だけを収録した録音も複数発表されるなど、現代のフルーティストにとって重要なレパートリーとして定着している。また、師であるポール・タファネルとの共著で1923年に発表された『完全なるフルート奏法 Méthode Complète de Flûte』は、今でもその一部が世界中のフルーティストのもとで重要な教本として使用されている。マルセル・モイーズをはじめ著名なフルーティストの多くがゴーベールのもとで学んでおり、その影響は現代にまで続いている。このように、フルーティストにとってゴーベールという人物は、レパートリーの面でもフルートというジャンルの歴史においても、重要な人物であることに疑いの余地はない。

しかしながらそういったフルートに関する功績は、音楽家ゴーベールの功績のすべてを表すものではない。彼はフルートのヴィルトゥオーゾであったが、それ以上に偉大な指揮者であった。パリ音楽院演奏協会とパリ・オペラ座という、この都市の主要な2つのオーケストラの首席指揮者を長年にわたって務め、聴衆やオーケストラの奏者たちから支持を集めていた。晩年にはオペラ座の監督にも就任し、当時の音楽界のトップで活躍していたのである。作曲家としてはフルート作品以外にも、さまざまな楽器のための室内楽曲、50曲あまりの歌曲作品、交響詩を中心とした管弦楽曲、オペラ・バレエなどの舞台作品

まで、多ジャンルに渡って数多くの作品を残しており、それらは当時実際に上演され、聴衆に受け入れられていた。つまり既知のフルート作品は、彼の作曲家としての仕事のほんの一部でしかなかったのである。

フルートに関する功績だけでも既に1人の音楽家として十分すぎるように思われるせいか、ゴーベールの作品をレパートリーとしている現代のフルート奏者の多くが、彼を著名なフルーティストとしてのみ捉え、その先の世界をイメージできていないように感じられる。ゴーベールに対する研究がこれまで十分に行われていなかったため、その音楽活動の全体像を捉えるのが難しい状況であったということも、原因として考えられるだろう。しかし、オペラ作曲家への登竜門であるローマ賞への参加が許され、受賞するほどの実力があつた彼を、いわゆる「フルーティスト兼フルート作品の作曲家」としてのみ捉えるのは正しい姿勢とは言えない。また、さまざまな時代や様式のオーケストラ作品を指揮し、スコアを熟知していたことが、作曲作品におけるフルートという楽器の扱いに影響を及ぼしていたことは間違いない。フルートに関わるもの以外の活動についても理解しないと、音楽家ゴーベールを真に理解することはできず、彼がフルート作品で表現しようとしたものを捉えることはできないのではないだろうか。

本研究の目的は、フルートの分野に限らない演奏活動の調査および全作品の目録作成によって、ゴーベールの多様で多面的な音楽活動の全貌を明らかにし、その音楽家像を再考することである。

まず序章で、ゴーベールに対する現在および当時の評価の例と、先行研究を確認した。全体研究としては1982年に発表されたFischerの博士論文があるのみで、2000年代によく伝記資料が発表されるようになるが、情報の誤りが散見されたり、情報量が少なかつたりと、どれも満足できるものではなかった。その他に限定的な研究はいくつか発表されているものの、資料の少なさからもゴーベールに対する研究がほとんど進んでいないことが見てとれる。

第1章ではゴーベールの音楽活動を概観した。まず第1節で、その生涯について記述した。先行研究に基づきながらも、その情報の誤りや不明瞭な部分の指摘・修正により、最新の情報へのアップデートを行った。第2節ではフルーティストとしての活動についてまとめた。特にキャリアの最初期については、フランス国立図書館が提供するオンラインデータサービスであるRetroNewsでの新聞・雑誌記事の調査によって、より詳細な活動の様子が明らかとなった。ゴーベールが15歳でパリ音楽院を卒業後すぐにフルーティストとしてパリの音楽界で活躍するようになったのは、すでに知られていたことではあつた

が、実際にどのような現場で活動を行っていたのかについては、これまでほとんど言及されてこなかった。10代の頃からサロンでの活動を中心に、多種多様なレパートリーを著名な演奏家たちと共に演奏していた経験は、その後の活動に大きな影響を与えただろう。また、要人が数多く参加するような場への出演からは、この若きフルーティストとしての注目度がうかがえるだけでなく、その名声を高める要因となっていたことが推察される。40代となった1920年代以降、演奏活動の軸は指揮へと移り変わり、1931年2月の演奏会を最後にフルーティストとしてのキャリアを終えていたこともわかった。そのほか、ゴーベールに献呈された作品や、パリ音楽院での教育者としての様子、『完全なるフルート奏法』の出版についてもこの節で触れる。第3節では指揮者としての活動に焦点を当てた。はじめにそのキャリアの成り立ちの様子を確認した後、首席指揮者を務めていたパリ音楽院演奏協会とパリ・オペラ座での活動を中心に、その活動の様子をまとめた。

第2章では作品目録を取り扱う。これまでもゴーベールの全作品をリスト化しようという試みはいくつかの資料で見られたが、どれも情報が薄く記述があいまいで、誤りも散見されるため、作品目録として信頼して使用できるものではなかった。作曲家としての活動を概観するにあたり作品目録は必要不可欠な資料であるとの意識から、新たに目録を作成することとなった。第1節ではその目録の作成方法について詳述した。現在、ゴーベール作品の楽譜はフルート作品を除くと入手できるものはかなり限られるため、まずはじめにその楽譜が最も多く所蔵されているフランス国立図書館のオンラインカタログを調査をした。しかしオンライン上で得られる情報には限りがあるため、実際の楽譜を閲覧する必要があるため、現地へ赴きその調査を行うこととなった。これにより、先行資料で不明瞭であった編曲作品等の関連性が明確になり、詳細な楽器編成や楽章構成、献呈先、歌曲作品等で使用されたテキストの作者等の情報の付加、整理をすることができた。さらに、これまでどの資料でも存在が示されていなかった作品も複数確認された。次に、フランス国立図書館の楽譜資料調査によって確認された作品の演奏情報をRetroNewsで確認する作業を行った。その結果、これまで明らかにならなかった多くの作品の初演情報を突き止めることができ、いくつかの作品で初演の時期と出版年とにズレがあることも判明した。また、本論文の執筆中に、ゴーベールの遺族からフランス国立図書館へと寄贈された自筆譜を含む多数の資料の内容が明らかになった。そこから、出版譜には記されていない情報や、楽譜が消失したものと思われた未出版作品の楽譜、全く新しい作品の発見など、多くの情報がもたらされた。これらの調査により確認された作品はおよそ130、編

曲されたものも含めると150にも及んだ。第2節は実際の目録部分にあたる。今回の目録では、すべて作品をひとまとめにして成立順に並べることを試みた。全作品の一覧表は付録に収録し、本文ではそれぞれの作品について詳述した。読み易さを考慮して、独奏曲および室内楽曲作品、歌曲作品、大規模作品（管弦楽曲および舞台作品）の3つのジャンルに分類した上で、それぞれのジャンルごとの成立順に記述した。大規模作品に関しては、声楽を伴わない作品、声楽を伴う作品（ローマ賞課題作品含む）、舞台作品の3つに分け、オペラやバレエなどはあらすじも記載した。こうした記述により、先行資料と比較して単純に作品数が増えただけでなく、内容の面でも大きく進歩したといえるだろう。また、すべての作品をまとめて成立順に並べるという試みから、その創作活動の全体像を掴むことが初めて可能になったのは、本研究最大の成果である。

第3章では、まず第1章、第2章の情報をふまえてその創作活動を概観した後に、フルート作品の概要およびその変遷と特徴について記述した。さらに、現時点で知り得る情報を基に、作品成立の時期や背景などを補足し、第2章で扱わなかった音楽的構造についても記したフルート作品の解題を、付録に収録した。目録の全体を眺めれば、フルート作品の作曲がゴーベールの作曲家としての仕事のほんの一部でしかなかったことが実感できるだろう。また、最初期の頃からオペラを書くことを意識していたことも見て取れる。つまりゴーベールの創作活動は、フルーティストとして自らのレパートリーを生み出すことを目的に始まったわけではなかったのだ。さらに、フルート作品の多くが管弦楽作品と繋がりを持っていたことも明らかになった。残念ながら現在それらは失われたレパートリーとなっており、その内容を知ることは難しい状況ではあるが、そういった事実を認識するだけでも演奏表現の選択肢は広げられるだろう。言うまでもなく、フルートという楽器はゴーベールにとって特別な存在であったが、唯一の表現方法ではなかった。彼がフルート作品の外にその何倍もの広い音楽世界を持っていたことを知り、その中での位置付けを考えることは、フルート作品の演奏により豊かな視点をもたらすことにつながるのではないだろうか。本研究を通して、ゴーベールの多様で多面的な音楽活動への理解が深まり、音楽家としての再評価が促されるとともに、フルート以外の作品も再び演奏されるきっかけとなることを願ってやまない。